論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　日本時代における台湾在来建築文化の調査・研究に関する史的考察
-『台湾慣習記事』を中心として-

氏　　名　　鄭　昭民

安江正直の「台湾建築史」、田中大作の「台湾建築の史的研究」と「「台湾建築の史的研究」に就て」、藤島亥治郎の『台湾の建築』は台湾の建築史学者によって日本時代の台湾建築史三書と評価されている。安江は台湾総督府土木部門の行政官吏で、1907年に建築史編纂の資料蒐集のために現地調査を行っていた。その復命書の総説にあたる部分は後に「台湾建築史」と題して『建築雑誌』と『台湾時報』で発表され、鄭氏時代・清国時代の漢民族建築を中心として初めて時間軸にそって論じた建築史的研究である。田中は台北工業学校の教師で、1937年に『台湾建築会誌』で「台湾建築の史的研究」と「「台湾建築の史的研究」に就て」を発表した。その内容は序説と目次のみであるが、台湾建築文化の全体像をつかむ、先住民・西洋人・漢民族・日本人の建築という分類体系を初めて作り上げた研究である。2005年には田中が戦後にまとめた『台湾島の建築に関する研究』と題する遺稿が発見されて、同年に原稿のまま中国語書名の『台湾島建築之研究』と名づけられて出版された。また同じ1937年に、東京帝国大学教授の藤島は日本学術振興会の援助を受け、20日間にわたって台湾西部と澎湖島の建築を重点的に調査していた。そのお成果に基づき諸種の先行研究を踏まえて、戦後の1948年に台湾建築史最初の著書『台湾の建築』をまとめた。『台湾島の建築に関する研究』と『台湾の建築』は共に戦後の出版であるが、その内容は戦前に蓄積されてきた調査成果に基づいて書かれたもので、日本時代における台湾建築史の研究に属すると言える。

しかしながら、田中が述べたように日本時代の台湾において「建築家の筆になるものではないが、台湾の建築に就きて断片的に種々記事」が多く存在しており、建築史三書の成立した背景には、これらの裏から支えていたような資料の存在も不可欠と思われる。よって、本論文は日本が台湾を領有した植民地初期に遡り、当時台湾総督府が異文化の社会構造を理解するために政府と民間の力を合わせて行っていた旧慣調査事業の成果の中で多様な情報を集めていた『台湾慣習記事』という雑誌を中心資料として、そこから在来建築文化に関する調査・研究を拾い出し、特に歴史的な在来建築に関する調査・保存及

び城郭・家屋に関する研究の諸文章に主眼を置き、その調査・研究の動機、研究方法及び「台湾建築史」・『台湾の建築』・『台湾島の建築に関する研究』への影響を明らかにすることを目的としている。

第一章は、まず『台湾慣習記事』の発行機関である台湾慣習研究会とその以前の慣習調査機関の設立経緯を辿ってこの研究会に特有の性質を明らかにした。次に『台湾慣習記事』の全体を対象としてそこに掲載された各コラムの特徴を捉握し、台湾在来の建築文化に関する部分を拾い出して整理・考察した。

以上から台湾慣習研究会がその役員構成から、これまでの諸旧慣調査機関と異なり、植民地政府が総力を挙げて設立し、行政・司法の官僚が共同で運営していた官製性格の濃い民間組織であることが分かった。その機関誌『台湾慣習記事』の各コラムからは、当誌が植民地政府の行政・司法に関する旧慣をはじめ土地・地方・蕃務などの諸調査事業の実態を明らかにするのが主要目的でありながら、台湾漢民族の風俗人情を中心とする情報の蒐集・交流の役割も果たしていたことが明らかになった。その中には台湾在来建築文化に関する内容も多く、調査報告の一部として断片的に現れており、それらが異文化の表象として扱われていたことも分かった。

第二章はまず、第10・12号の「台南名所考」と第2巻第1号附録の増補版に収録されている「名勝旧跡」、また第6巻第7号の「台湾彩票発行の目的範囲につきて当局者に望む」をはじめとする彩票発行と関係する廟社保存をめぐる一連の議論を主要資料として、当時の歴史的価値のある在来建築に対する認識及び、在来建築の保存に関する意識を明らかにした。

その執筆動機の考察から、「台南名所考」と「名所旧跡」はそれぞれは地方志における古蹟部分の編纂、台湾の観光スポットの紹介のために作成されたことが分かった。このために、現地調査と文献調査を用いて歴史的価値を有する建造物・遺跡それぞれ 35 ヶ所、51 ヶが選出されたのである。「名所旧跡」作者の伊能嘉矩は渡台して以来、多くの踏査経験を積み、台湾の史跡に対する概念・保存の意識を培ってきていた。伊能は 1906 年の台湾彩票の発行に伴う廟社保存という制度の成立をめぐって、『台湾日日新報』副主筆の田原禎次郎ともに史跡保存論者として活躍していた。当時廟社保存を台湾民心を収攬するための施策と考えていた植民地政府に対し、田原は史跡保存の重要性を喚起し積極的に政府が保存活動に取り組むように促し、伊能は従来の保存意識にしたがって日本内地のような保存に関する法の整備、保存対象の拡大を要請していた。しかし、政府の対応を待たずに台湾彩票の発行が急に中止になったため、廟社保存も実績のないまま終結してしまった。

第二章の後半では、1930 年史蹟名勝天然紀念物保存法が台湾で施行された前後に、政府や民間により行われていた基礎調査と比較することで、「台南名所考」と「名所旧跡」の歴史的な在来建築に対する認識の特徴を見出した。具体的には「台南名所考」作者の花岡の官設施設を重視する傾向、「名所旧跡」作者の伊能の歴史性に対する執念が

浮かび上がった。一方、「台南名所考」に挙げられているオランダ時代・鄭氏時代の建築、「名所旧跡」に挙げられている石器時代・先住民の遺跡が後に共に史蹟・名勝として注目されていたことも明らかになった。

第三章は、第 2 巻第 1 号の「本島諸城の建築及管理の方法」、同巻第 3・4・6 号と第 3 巻第 5・6 号の連載「台湾築城沿革考」を主要資料として、その研究動機・方法及び台湾建築史三書への影響を明らかにした。

伊東忠太講演の摘録「北京城建築の特性」及び「本島諸城の建築及管理の方法」が『台湾慣習記事』に掲載されたことが、伊能嘉矩が当誌で「台湾築城沿革考」を連載するきっかけとなった。特に、「本島諸城の建築及管理の方法」は台湾植民地政府が財政制度を構築するため、城工租をはじめとする清国の城郭に関する租税旧慣を解明しようとした際の調査報告によってまとめたものと推測された。これに対して、「台湾築城沿革考」は台湾に関する史料に詳しい伊能が、歴史的視点から文献調査を行い、台湾における 12 ヶ所の城郭の創建・移転・増改築や修繕の経緯を明らかにしたものである。但し、この連載の終わりを待たずに、伊能は台湾城郭の構成要素・形式・材料・建築的特徴を説明した緒論・結論にあたる部分を増補して、先に本の形で「台湾城志」を出版した。各論的な「台湾築城沿革考」より「台湾城志」の内容構成は一層完備されていると言える。そして伊能が逝去した後、1928 年にその遺稿が整理されて刀江書院により『台湾文化志』として上・中・下 3 巻で出版され、「台湾城志」の内容がその第三篇「文治武備沿革」の第四章「城垣の沿革」に収録された。この内容の比較を通して、日本時代の台湾建築史学研究の分野において、明治期の「台湾建築史」は「台湾城志」を参考とし、昭和期の『台湾の建築』・『台湾島の建築に関する研究』は『台湾文化志』を参考とし、いずれも伊能の台湾城郭の形式・材料に対する分類や城郭の各論の一部を踏襲していることが確認できた。

第四章は、まず植民地初期における台湾漢民族の家屋に対する認識の概況を整理した。そして第 4 巻第 6・8 号の「台湾に於ける家屋の構造」・「台湾に於ける普通家屋内の装置」を主要資料として、1903 年に開催された第五回内国勧業博覧会の台湾館における漢民族の住居展示との関係、当時の認識の概況との相異、台湾建築史三書への影響とその拡散のルートを明らかにした。

「台湾に於ける家屋の構造」と「台湾に於ける普通家屋内の装置」は図面・内容構成・用語・表音などの対照によって、第五回内国勧業博覧会の台湾館における漢民族の住居展示を主な根拠として書かれたものであることが確認できた。これは従来の記述や図面にあった局部的・猟奇的・偏見的な情報に比して、多面的に家屋を紹介したり、住居展示の家屋平面図と庁堂・房間装置を写した図面を添付したりしているため、より完成された家屋論と言える。作者と判断された伊能嘉矩はさらに家屋平面図の形式にしたがって、単独式家屋・連続式家屋の 2 つの家屋形式分類を新たに提出した。そして、図面・内容構成・語句を対照することで、伊能の家屋論は『台湾風俗誌』、『台湾』改訂版を

通じて、その影響力が地理的には台湾・日本・満州にまで、学問分野としては地理学・民俗学・建築学にまで及んでいることが確認できた。藤島亥治郎の『台湾の建築』と田中大作の『台湾島の建築に関する研究』にも、それぞれ影響の跡が窺える。

以上より、台湾慣習研究会が官製性格を持つ民間組織として植民地初期の政府・民間という二重体制の一端を担い、漢民族を中心とする調査事業に携わっていたことが明らかになった。その機関誌の『台湾慣習記事』は台湾研究のパイオニアである伊能嘉矩にとって、台湾の歴史地理や漢民族の社会風俗に関する研究を発表する最適の場となっていた。伊能の学問の形成において、台湾総督府の命令による数回の踏査で積んだ経験がその基礎となっていたため、彼の文献調査・現地調査で完成した清国時代の城郭・漢民族の家屋に関する研究は当時統治者の植民地台湾に関する情報収集の副産物と言える。その影響は後の日本時代の建築史三書にも及んでおり、台湾建築史の構築に寄与をしたのである。